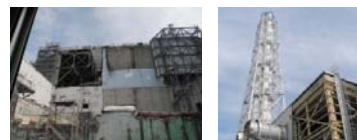


## 福島原発をゆく(6)

緊張気味に第一原発の視察を終え、いわき駅へと帰路につく。バスのなかで、視察を思い起こしながら(写真は加藤正文さん撮影)、調査メンバーが視察の感想などを述べていった。さいごに宮本憲一先生が次のように締めくくった。



原発が生きている。1~3号機に近づくと、急に放射線量がぐんと上がった。まだ危険極まりない状況だ。廃炉に向けて、相当長い時間、技術が必要だろう。原発4基だけで、国土と多くの人々の生活を破壊した。このことの意味、被害の大きさを自分の目で確かめること、被害の地域を実際に歩いてみるのが大切だ。



今回の福島原発調査について、私なりに感想を述べておきたい。

1. 放射線衛生学者の木村真三さんの案内で原発地域を回って、目に見えない放射線の怖さを実感した。線量計を草むらに近づけると、急に線量が上昇する。除染なるものの効果が限定的であり、ホットスポット的な場所が点在することも理解できた。そして、モニタリングポストより、木村さんの線量計の数値の方が高いことにも注目した。このモニタリングポストが、大幅に削減されようとしているのは大問題だ。
2. 「帰還困難区域」について。フェンスで覆われ、人気のない住宅や店舗、時間が止まってしまった街並みに衝撃をうけた。浪江町の山あい一面に広がる柳の木の群れ。そこは原発事故前には、田んぼが広がっていた。地域の人々の生業、暮らしの場であった。7年という時間の流れ、自然の変化の激しさを痛感した。
3. 宮本先生が言われたように原発が生きっていて、放射線を放出し続けているのが確認できた。とりわけ1~4号機を眺めながら、原発事故により取り返しのつかない被害をもたらしたことに、心の底から怒りがこみ上げてきた。敷地一杯に広がるタンクや設備を見て、原発事故への際限のない困難な作業が実感できた。
4. 廃炉作業の設備や「作業員」の群れに、原発事故処理にかかる膨大なエネルギーと費用を垣間見た。原発というものが、コスト的にもいかに割の合わないものかを、廃炉作業からも痛感。翌朝、いわき駅前のビジネスホテルで、多くの「作業員」の人たちと朝食をともにした。このホテルから浜街道を北へ、原発構内などに向かうのだろうか。今後とも時間軸と空間軸によりながら、福島原発事故とその行方、原発地域の動向を注視していきたい。

シリーズ「福島原発をゆく」は、この6回をもって、ひとまず閉じることにする。

(2018年7月4日)